

## 野育ちT君の記

松垣七郎

(会員・佐伯市下久部)

T君は私より二才年下である。彼は事情があつて、父親と祖母に育てられていた。生来明るく個性的で活力に富み、何でも「味!!うめえなあ」と言つて喜んで食べる彼は育て易い子でもあつたらう。

私などが食べ物の好き嫌いを言つたりすると、父や母から苦情を言わずにTのように何でも食え」と叱られたものである。

夏が来ると彼の天下で、田植えの時など素っ裸で大人と一緒に田に入り、泥人形になりながら、同じ年の親友K君と二人で股間に苗の根を挿み、村の先輩達から習ひ覚えた運動会の応援歌の節回しで「チンチンのーひーげだよーピカピカひーかーる」と声を揃えて歌っていた。兄弟のいなかつた彼は、村の遊び仲間と喧嘩しても味

方が無くて孤立するようなこともあつた。しかしそれにもめげずに、年上の仲間達の意地悪や悪口などに対しても、石を投げ負けずに悪口を言い返してしたたかに抵抗していた。仲間達が投げ返した石を、不器用に跳び上がつてよけていた、小さなゴム長をはいたT君の幼い姿が今も臉に残る。

或る日、村の爺さんがT君に石を投げられて「こりや!!危ねえが」と叱りながら、目をカッと見開きヨタヨタと足をもつれさせ必死に逃げているユーモラスな姿に思わず笑つてしまったことがある。爺さんはT君のいたずらを叱つたためにこの難に遭つたものであろう。

T君のトツタン(父)は馬車曳きをしていたので大きな馬を飼つていた。馬車が休みの日、トツタンは、T君を連れて馬を曳き、家から二百弱余り離れた往還端(県道)まで行き、そこでT君を馬に乗せてやつた。まるで大木のような馬車馬の背中は、幼いT君には跨りようもなく、掴まりどころのないものであつた。トツタンは「T!!首の毛(タテガミ)をシャンととこまえちよけ(しっかりとつかまっておけ)」と言うと手綱を放した。馬は自宅に向つて歩きかかったが、やがて途中から走り出

した。T君はトツタンの言い付けどおりタテガミに必死でしがみついていたが、自宅の近くの神社前広場のところまで来ると、後からついてきたトツタンの「オー!!!」と言う鋭い停止命令が出され、馬は忠実に急停止した。はずみを喰らったT君はものの見事にコロリと落馬した。途端にワツと泣き出したT君に、幸い怪我はなかった。

◇ ◇ ◇

日中戦争が始まると、村でも家々の電灯を消し、消火作業の訓練などする防空演習が行われることがあった。夏の間中、素っ裸か猿股（パンツ）一つで田圃や小川で遊んでいたT君の肌は、日に焼けて全身黒光りしていた。その彼が、黒い猿股をはいて夜の防空演習の見物に来ていた。暗い中で活動していた大人達は、押し倒されたT君の悲鳴で初めて彼の存在に気付いた。闇夜のクラスならぬ「闇夜のT君」の姿を、大人達は見分けることができなかつたのである。

T君が学校に上がると、やがてトツタンは後添いの奥さんをもたらした。彼女は純朴で陰日向のない好人物であった。T君もそんな彼女を「お母さん」と呼んでなついていた。そのうち弟（異母弟）も生まれ、当時の慣習ど

おりT君もそのお守りを受け持つようになった。就学前から、トツタンに買ってもらったカルタの「あさひは赤いなアイウエオ」「柿の木くりの木カキケコ」という文句を得意気に唱え、少しはカタカナも覚えていた彼は、長ずるに従って知的欲求も深まって行つた。弟をおんぶして道端で遊びながら、誰からか借りて来た「少年俱樂部」や漫画の本など読みかかると、道を人が通ろうと大八車が通ろうと、背中の弟が泣き叫ぼうとシヨンベンを垂れ流そうと一向に動じる様子もなく一心に読むふけていた。まさに二宮金次郎を思わせる姿であつた。

弟が少し大きくなると、そのお守りに乳母車を使うようになった。元気のいいT君は、弟を乗せた乳母車を押し走りまわり、弟もそれを喜んでいた。

そんな或る日、例のとおり弟を乳母車に乗せて村の坂道を全速力で走り下つていたところ、運転を誤り乳母車は弟を乗せたまま道の脇の谷に勢いよく跳び込んでしまつた。

丁度自宅の近くだったため、投げ出されて谷の中で火がついたように激しく泣く弟の声に驚いて、慌ててかけつけたお母さんが「ほうら見よ、走るきい落ちてたじゃね

いえか」と叱ったところ、T君は走って逃げてしまった。それっきりT君の姿はどこにも見当たらず、夕食の時間になっても帰らずに、T君の家では方々探し回って大さわぎになった。探しあぐねていると、押入の中で何かの気配があるので家人が戸を開けて見たところ、フトンの上でT君が大いびきで眠っていた。憎めぬ彼の姿に、家人もやれやれと胸を撫で下ろしたのである。

◇ ◇ ◇

やがて彼も県立中学校に入学し、数年後に終戦を迎えた。戦後の学生改革の混乱期に、ここ佐伯では旧制中学校を一高、旧制高女を二高とする制度が敷かれた。曾て経験したことのない青年子女の男女共学である。

一高は元中学校だったため男子が主流であった。これに対して二高は高女の後身で圧倒的に女子が多かった。旧制中学、高女の生徒達は、そのどちらに行くかは各人の自由であった。T君は学校の違いなどは気にもかけず、迷うことなく女子の多い二高に移った。

青年期にさしかかっていた彼には、かつての石原裕次郎を思わせるような、新しい時代の青年らしい風貌があった。女学生との交際をタブー視するような古い時代環

境の中で育ったにもかかわらず、柔軟な発想のできる自由見的な彼は女性から見ても魅力があったらしく、高校時代は大いに青春を謳歌していた。

解放された高校生活を楽しみながらも、持つて生まれた知能も高く、在学中に国家公務員試験に合格した彼は卒業と同時に就職し、遠隔の地を転々としながらやがて結婚し、幸せな家庭を営んでいた。

そんな彼が思いもよらぬ病を得て、ふるさとを遠く離れた町で、心の自然児として生きたその生涯を閉じた。まだ職も現役中で、年離れたトツタンや愛する奥さん、愛育途上の子供達を残しての痛ましい死であった。

